氏　　名		森　下　麻　子
学 位 の 種 類		博士（美術）
学 位 記 番 号		博美第９号
学位授与年月日		平成２７年３月２５日
学位授与の要件		学位規則第４条第１項該当者
題目	学位論文題目	動物画と感情 ―日本画における飼育動物の表現―
	研究作品題目	「ひだまり」2012 年、紙本彩色（100×100cm） 「はじまりの扉」2013 年、紙本彩色（130.3×194.0cm） 「胸騒ぎ」2013 年、絹本彩色（75×130cm） 「水沫」2013 年、絹本彩色（75×130cm） 「つなぐ輪」2013 年、絹本彩色（130×75cm） 「合図」2013 年、紙本彩色（116.7×116.7cm） 「夜明け前」2013 年、紙本彩色（181.8×227.3cm） 「明日の予感」2014 年、紙本彩色（100×100cm） 「エランドの親子」2014 年、紙本彩色（130.3×162.0cm） 「朝が来る」2014 年、紙本彩色（181.8×227.3cm） 「群れと生きる」2014 年、紙本彩色（181.8×227.3cm） 「居場所」2014 年、紙本彩色（181.8×227.3cm）
論 文 審 査 委 員		主　　査　　教　授　　岡　田　眞　治 副　　査　　教　授　　北　田　克　己 副　　査　　教　授　　中　　敬　夫 外　　部　　東京藝術大学 審査委員　　准教授　　荒　井　　経

１　学位論文の要旨

私は作品に飼育動物をたびたび登場させ、その動物たちに自身の思いを託して絵画を制作している。私が飼育動物に共感し、描いている理由には、実際に実物を見て観察できるという利点以外にも、根源的な関心が存在するはずであり、動物画の先行作品中に、私の作品の原点を見つけ出そうと研究を進めていく。そして、最終的には、現代に生きる私たちは動物画にどんな役割を求めているのかを問いただしながら、先行作品の研究と自身の制作によって、動物画の可能性を追究していくことが本研究の目標である。

第一章では、私が飼育動物を描く動機を述べたのち、本論で扱う飼育動物の定義について記述する。また、私が飼育動物を描くときに、動物に対して感じる三つの感情である「可愛い」「哀しい」「逞しい」という感情について、ここで述べておく。

私は人間と共に生活し、野生生活とは縁の浅い動物たちは、都市生活で暮らす人間たちと同じような環境で生きているのではないかと考えはじめた。そして、そのような環境の中でも、動物たちの強く生きる姿や、時たま見せる人間の手の届かない能力の高さに、野生の姿を垣間見て、動物に強く惹かれるのである。人間と共通する「哀しさ」を携えなが

らも「逞しく」生きる動物園の動物たちに、自身の理想を重ね合わせ、動物画を描いているのである。

第二章では、私の動物観の源流を探るため、日本美術史のなかの動物画を選出し、その変遷をたどるため、時代順に論述していく。

２－１は、「原始時代――神秘と呪術の世界の動物たち」、２－２は「古代・中世――霊獣と現実の動物たち」、２－３は「近世――理想世界からの独立」、２－４は「近代――写生と写真」、２－５は「現代に描かれた飼育動物たち」というタイトルに設定し、それぞれの時代の動物観を詳しく述べていった。

第三章では、第二章で述べた動物観と、同時代の動物観を比較した後、現代において私が描きたい動物画について、それまでの考察を踏まえながら論述している。

・「可愛い」について

私の「可愛い」表現と近代の「可愛い」の表現の違いは、これまで表現されていた身近な動物やペットだけでなく、動物園で暮らす野生種の動物たちに向けられる感情にまで、拡大させることにある。

・「哀しい」について

人間と同じような「哀しみ」を背負った飼育動物たちが「逞しく」生きる姿を描き、私の理想の生き方の比喩として表現したいのである。

私の表現したい「哀しい」感情は、生きる哀しみを表現するという点で、第二章の二節の 2－5 項の作家たちと共通しているが、この表現は特に「哀しさ」を感じさせるものであって、私の表現の目標は最終的に「逞しさ」を感じさせるものであるという点で、異なっている。

・「逞しい」について

飼育動物は、生きる「哀しみ」を携えながらも、懸命に生きる、穏やかで想像力をかき立てるような、内に秘めた飼育動物の強さを持っている。私にとって「逞しい」感情が感じられるものは「逞しく」生きる飼育動物たちの、生き方そのものの力強さである。

第四章では、第三章で導いた結論を裏づける自作品を紹介し、その制作方法や意図を制作順に解説する。

最後に＜終わりに＞では、私が表現したい三つの感情を明らかにし、実践でどのような成果が獲られたのかを述べていく。飼育動物をモチーフに描くとき、「可愛い」「哀しい」の感情については、二章、三章の考察を通して、私が目指す感情を探し出し、描くことが出来たが、「逞しい」感情については世間一般の意図する感情に囚われ、私の「逞しい」感情を十分に表現するには至らなかった。私が表現しようとしていた飼育動物に対する感情は、理想の生き方や憧れであり、そのような思いを込めることができる飼育動物は、私にとって、もっとも人の感情に寄り添った表現を可能にしてくれるのである。

２　学位論文審査の要旨

森下麻子氏の学位申請論文「動物画と感情―日本画における飼育動物の表現―」は動物に対する「可愛い」「哀しい」「逞しい」という三つの感情を起点として飼育動物に焦点を絞り、その起源や成立課程を歴史的かつ理論的に考察した論考である。

本稿は四つの章から成り、第１章「動物と感情―研究の方向について」は筆者がいかに

して「三つの感情」を起点と考えるに至ったかんいついて論考し本論で扱う飼育動物の定義について論述している。

第 2 章では日本美術史における動物画を選出しその変遷を辿り時代順に論述しており分量的には本稿の半分以上を占める緻密で詳細な美術史研究となっている。近代になり動物園、写真の登場による絵画への影響に着目するなど作家らしい視点での考察は興味深い。

第 3 章では氏の動物観が成立するに至るまでの三つの感情の変化について記述し、その中から現代に生きる氏の動物画と現代の他の作家たちの動物画との共通点や相違点を析出することにより氏自身が描こうとする動物画との固有性を明らかにしている。

第 4 章では自作品を三つの時期―市域動物の飼育環境と感情の関係について考察し始めた第一期、描写される飼育動物を氏の考える独自の「哀しさ」や「可愛さ」によって限定していった第二期、そして氏の探求がとりわけ飼育動物のけなげで哀しみを帯びた「逞しさ」へと収斂した第三期―に区分しつつ、そのそれぞれの時期の自作品について周到な分析を行っている。

以上のように三つの感情に注目し日本美術の先行作品と比較・研究することにより、氏は現代に生きる作家としての視点で飼育動物を深く論考しており日本画研究領域の学生らしい特色を発揮することができた。

作品はいずれも一定水準以上の完成度を持ち、動物自体の描写も的確で氏の動物への優しい眼差しが感じられる。また、動物画の日本美術史の考察を深めたことで自身の立位置を明確にし誠実にモチーフと向き合う姿勢は好感が持てる。

今後、現在の手堅い表現を基盤として更に技法・素材等の研究も進めつつ、本研究で深めた動物観を活かした作品を期待したい。

３　最終試験結果の要旨

審査終了後に審査委員によりこれまでの研究プロセス、及びその内容、今後の可能性を協議した。

論文では飼育動物に対する三つの感情という条件に照らし合わせながら美術史上の作品を検証しており、本研究で深めた独自の動物観は創作を主軸に置く学生の博士論文として特色のあるものとなった。

作品についても一貫したテーマで完成度の高い作品を数多く制作しており、三年間の堅実な努力を評価したい。学外の公募展においても積極的に出品・入選し評価を受けており着実に成果を上げている。今後作家としての可能性を高く感じさせる点も評価された。

以上により、審査委員 4 名による審査の結果、博士後期課程学位授与審査は合格に値するという結論に至った。